

『趣味はスキーです』

1 スキーを始めたきっかけと学生時代

私は、小学校に上がる前年から高校を卒業するまで福島市の隣町（現在の伊達市）で過ごしました。実家から西の方角には吾妻連峰の山腹にあるスキー場が見え、北の方角には宮城県との県境の山々の奥に蔵王を遠望することができましたが、スキー場まで行ってスキーヤーが実際に滑る様子を自分の目で見たことはありませんでした。

私がスキーを始めたのは大学1年生の12月、菅平スキー場です。1959年（昭和34年）の冬でした。その年の秋、登山とスキーを両方やるとのキャッチコピーにつられて「東京大学法学部山の会」（後に「東京大学山の会」と改称）というサークルに入っていました。冬になり、菅平スキー場でスキー合宿をやるというので、アメ横に行ってスキー用具一式を買いました。これを担いで上野駅に行き、夜行列車で上田駅に向かいました。信越線は当時SLでした。

買ったスキー用具はというと、いまの若い人たちには、まるでスキー博物館の展示品の話かと思われそうです。スキー板はイタヤとナラの合板、トップからテールまで20cmほどのスチールエッジが何本も連続してねじ止めされていました。スキー靴は革製、今のようなプラスチックブーツが市販されるはるか以前です。ビンディングはカンダハーという固定式（セーフティビンディングが登場する以前です。）、ストックはトンキン竹に藤の大きなリングが十文字に渡した革製のひもで結びつけられていました。

菅平スキー場での合宿では、地元のスキー学校のスキー教師から手ほどきを受けました。初日の午前中は雪の積もった田んぼのような平地をいやになるほど歩かされました。午後になってキックターンを教わり、ゆるい傾斜地に移動してハの字登高の練習をし、最後にボーゲンをちょっと練習しました。手ほどきはこれで終了、明日はリフトに乗せてやると言われました。翌日リフトに乗って上まで上がると、あとは好きなように滑れ、でした。「好きなように」もなにも、超初心者の私は、緩斜面に設けられたTバーリフトで上がり、滑る、転ぶ、起きて滑る、また転ぶの繰り返しでしたが、午前中でなんとか滑れるようになり、午後は先輩たちと一緒に本式のリフトに乗りましたが、今では珍しくなった一人乗りのチェアーでした。

合宿が終わり、福島の実家に帰省しました。スキー用具一式を担いで。実家から福島駅に出てバスに乗り換え1時間も乗ると高湯温泉、そのすぐ上に実家から見えるスキー場がありました。翌朝実家を出発し、たっぷり1日滑って帰宅しました。

こうして私のスキーが始まり、卒業するまで毎シーズン、サークルのスキー合宿や大学生協が企画するスキー合宿に参加したほか、アルバイトで金を貯めては友人を誘ってスキー場通いをしました。少し上達すると、もう少しよいスキー用具が欲しくなります。ヒッコリー製のスキー板、合竹製（竹材を張り合わせて作る）やスチール製のストック、オーダーメイドの革製スキー靴などです。しかし貧乏学生には高値の花。卒業して給料をもらえるようになってからと我慢しました。

大学卒業直前の1963年（昭和38年）3月、サークルの仲間を誘って野沢温泉スキー場に行きました。リフト乗り場まで少し遠いが1泊3食付き550円（5,500円ではありません。）で泊まれるという民宿を見つけ、仲間5人と2泊3日思う存分滑りました。私は、帰りは東京に戻らず、飯山線で越後川口に出て新潟回り、羽越本線、磐越西線、東北本線と乗り継いで実家に帰れば交通費の節約になるかもと、調べもしないで東京に戻る仲間と別れました。運がよければその日の内に福島駅までたどり着くだろうとの甘い期待は、羽越本線から磐越西線への乗り換え駅である両津駅で打ち砕かれました。駅員の言うには、「磐越西線は最終が出てしまった。明日の朝まで乗れないよ。」困った私は駅員に、「金がないので駅のベンチで夜明かししてもよいか」というと、気の毒に思ったか、親切な駅員は、「安く泊めてくれるか駅前の宿に聞いてやる」。駅員紹介の宿にいくら払ったか忘れましたが、翌日実家に着いた私の有り金は100円もありませんでした。

学生時代のスキーは、とにかく目一杯滑ることに終始しました。どこに行っても、買った1日券（または借りた社員証・公務パスなど）を持って運転開始前のリフト乗り場に行き、リフトが動き始めたが最後、営業終了時まで終日リフト乗車とスキー滑走で過ごすのが常でした。宿の朝食のごはんでおにぎりを作り、ランチもリフトの上です。

2 社会人になってのスキー

大学を卒業して司法修習生となり、2年間国家公務員に準ずる身分で給賞与をもらいました。給与水準は銀行に就職した同期を優に上回る水準でしたから、冬の賞与でスキー用具を一新できました。スキー靴は、その数年前マナスル初登頂に成功した日本の登山隊の登山靴も作ったという飯田橋のなんとかいう靴屋に行き、紐締め革靴をオーダーメイドで作りました。スキー板はクナイスルのホワイトスターやヘッドのメタルスキーなど欲しいものがありましたが、初任給の2カ月分を超える価格で手が出ませんでした。ストックは竹製から金属製にグレードアップしました。

2年間の司法修習生が終わり、大手法律事務所の末席弁護士になりました。上司がいて年がら年中仕事に追いまわられる生活で、暮正月の休み以外にスキーに行くのは時間的にも気力的にも大変でした。そうは言っても、所属事務所の顧問先の一つが国有林を管理する役所で、北海道から九州まで出先機関がありましたので、雪がある土地に出張するときは現地のスキー場を世話してもらって滑りました。弁護士バッジを付けて2、3年経つ頃に単身出張で札幌に行くことになりました。羽田空港から千歳空港に飛ぶところを夜行列車で青森に行き、八甲田で滑ってから青函連絡船で北海道にという安上がりプランを思いつき、実行に移しました。宅急便がない時代ですから、スキー用具一式と仕事用の一式を自分で運ばなければなりません。大変というか物好きというか……。それでも顧問先から業務用の大型雪上車を運転要員付きで提供してもらい、3月の八甲田の山々（八甲田大岳、高田大岳など）を次々と滑りました。山スキーですから、本来は自分の足で登らなければならないところを機動力でバリバリと登るのですから、こたえられません。その威力と有り難みは後年同じ八甲田の春、スキーを担いで自分の足で山に登って滑ったときに思い知らされました。

社会人になると学生時代にやっていたスキーをやめてしまう人が多いのですが、私の場合は、今日までほとんど毎シーズン、スキーを続けてきました。妻は結婚する前から、そして子供が生まれてからも私のスキーに付き合わされました。長男が1歳のとき、親子3人列車を使って猪苗代スキー場に行きました。妻は布製オムツと離乳食を詰め込んだ大きなザックを背負い、私はもっと大きなザックと2人分のスキー用具一式を担ぎました。スキー場やホテルで子供を預かってくれるサービスがない時代でしたから、ゲレンデの真ん中に生えていた大きな松の樹の下に穴を掘って厚着させた長男を置き、私と妻は交代で滑りました。

長男に続いて次男が生まれ、その年に私の留学のため親子4人そろってアメリカに渡りました。アメリカには日本でよく知られているコロラド州のアスペンとか、行きたいスキー場がありました。住んでいたのが前半テキサス、後半ニューヨークでしたから、学生の身分でファミリースキーは高嶺の花でした。帰国してファミリースキーを再開、マイカーで出かけるようになり、荷物運びの苦労はなくなりましたが、当時はスキーブームの最中で宿泊予約をとるのに一苦労、宿泊代も帰国後に生まれた長女を含めて一家5人ですから、馬鹿になりません。西武が苗場にスキーヤー向けの分譲マンションを建設するという情報を仕入れ、これだとばかりに飛びつき、工事の着工前に50㎡の1室を衝動買いしました。いつでも行きたい時に予約なしで行けるので、ファミリースキーのほかに私自身はマンションをベースに苗場と近辺のスキー場に毎シーズン10回近くは通いました。当初は関越自動車道も常磐自動車道も外環もなく、柏から苗場まで渋滞なしで7時間かかりました。その後、部分開通から全面開通した高速のおかげで、今では2時間半に短縮です。

しかし、このようなスキー場通いはいつまでもできるものではありません。頑健さでは人に負けないと自負していましたが、数年前に不整脈と弁膜症を発症して私のスキー場通いは大きくペースダウン、追い打ちをかけるように昔からのスキー仲間も次々に健康その他の理由で脱落、今やシーズンに3、4回となりました。

3 ゲレンデスキーと山スキー

私は生来運動神経が良い方ではありません。スキーの滑走技術の上達は40歳代で頭打ちになりました。整備されたスキー場でリフトやロープウェイ、ゴンドラを使って滑るというスキースタイルに興味がなくなり、代わりに山スキーを始めました。スキー場にリフトやロープウェイ、

ゴンドラがなかった昔のスキーヤーは、欧米でも日本でもスキーと言えば山スキーしかありませんでしたが、便利な生活に慣れた現代人には心理的な壁があるようです。

山スキーは、心理的な壁のほかに金銭的な壁もあります。山スキーは自分の足で山に登って滑り降りますので、ゲレンデスキーの用具をそのまま使うことはしないのが普通です。スキーを付けての登りで後退しないようにスキー板の滑走面にシールというものを貼り、山の上に着いたら外して滑走を始めます。ビンディングと靴は歩行時に靴のかかどが上がるように作られた山スキー専用のもの、ストックも伸縮式で大きめのリングをつけた専用のものを使います。ほかにも雪崩で生き埋めになったスキーヤーの場所を感知して救助するため（場合により救助されるため）の電波受発信器、救助時に使う伸縮式の長いポールとスコップ、万一の場合に野営するための専用テントや炊事用具が必要ですから、スキーヤーが山スキーを始めるとなると、初期費用がかさむのが難点です。

しかし、ゲレンデの混雑を離れて大自然の中に入り、スキーヤーに踏み固められていない斜面を自分の好きなように滑る山スキーは、整備されたスキー場でリフトやロープウェイ、ゴンドラを使って滑るゲレンデスキーにはない魅力があります。私は学生時代からずっと登山もやってきましたが、無雪期に登山ルートのおおりに登った山に山スキーで行き、好きなコースで滑るのは格別の楽しみがあります。眼に映る景色も無雪期とは別の世界です。私が山スキー（またはスノーボード）で頂上または頂上近くから滑った山の数は記録していませんので正確には分かりませんが、30座は越えていると思います。その中には、登山愛好家に知られる「深田百名山」が15座含まれています。（八甲田山、岩木山、岩手山、鳥海山、月山、吾妻山、安達太良山、会津駒ヶ岳、燧岳、至仏山、巻機山、浅間山、立山、乗鞍岳、御嶽山）

近年山スキー（または山スノーボード）で滑ってみたいという人が着実に増加しているようです。（「山スキー」といわずに「バックカントリー」とか「オフピステ」ともいいます。）管理されたスキー場でないところで滑るのですから、やることは冬山登山と同じです。当然遭難事故のリスクは当然あります。「だから禁止または厳しく制限すべきだ」というメディアの論調が見られますが、個人の自由と責任、これに対比してのスキー場経営者と警察、消防その他の公権力の責任と限界についての考察が欠けています。このテーマは本稿の枠外ですから、これ以上は論じませんが。

4 スノーボード

私は50代半ばでスノーボードを始めました。今でも続けています。始めた当時は日本のスキー場はほぼスキーヤー一色でスノーボーダーを見かけることは稀でしたが、今やスキー場ではスノーボーダーが過半数です。

私が最初に滑ったのは上越の岩原スキー場でした。20年近く前です。スノーボードのレンタルを始めたというので早速借りて、店員に初心者教える有料レッスンはないかと聞くと、「まだありません。皆さんリフトの上から上手そうなスノーボーダーを観察して覚えるようです」との返事でした。こうして見よう見まねの独習が始まりました。1日でなんとか滑れるようになり、私は早速用具を仕入れに神田に行きました。国産のボードはなく、買えるのは輸入品だけでした。店員に相談すると、「スキー歴が長い方はアルペン用のボードから始める方が多いですよ」というので、言われるとおりにアルペンのボードとブーツを買いました。（スキー場で普通に見るのはフリースタイル用のボードです。サイズが短く、幅が広く、前にも後ろにも滑ることができ、ジャンプや空中回転も容易です。ブーツもアルペンのハードブーツと違い、ソフトブーツを履きます。）

数年が経ってフリースタイル用のボードとブーツを購入しました。バックカントリーで使うにはフリースタイル用の方が扱いやすかったからです。

5 スキー/スノーボードのお誘い

スキーと比較してのスノーボードの魅力は、「かっこいい」という以外に、初期費用が安い、習得するための時間と費用が少なく済む、新雪・深雪での滑走が容易、持ち運びが容易、という点です。「覚えるのが大変そう」、「危険そう」という声もありますが、そんなことはありません、スキーヤーであってもなくても。

私と一緒に登山、スキーまたはスノーボードをやってみるか（あるいは話だけでも聞いてみるか）とお考えになった方がいらっしゃいましたら、是非ご一報願います。後期高齢者目前につき年齢相応のことしかできませんが。連絡は yoishizawa@gmail.com へ。

私の拙文をここまでお読みいただいた方に心から感謝いたします。

平成 27 年 2 月 石澤 芳朗